障害児・者のきょうだいが抱える心理社会的問題に関する研究

吉井　綾那

（田中　史子ゼミ）

問題・目的

障害児のいる家庭において、障害のある子どもの兄弟姉妹（以下「きょうだい」と記す）は、障害のある子ども（以下「同胞」と記す）や親を支える役割を期待されている傾向にある。また、きょうだいは同胞と接する時間が親と同等あるいはそれ以上であることもある。それに伴いさまざまな困難を抱え、その抱える困難や要因は多種多様であることが明らかにされている。例えば、登下校時や家などで同胞の面倒を見ることを任される・期待されることにより、きょうだいの友達との交流が減り、家庭外の体験が少なくなる。また、親の関心が同胞に向くことによって、甘えたいが甘えられないという葛藤が生じるなども、きょうだいが抱える困難の１つに挙げられる。

石崎（2001）によれば、きょうだいは一般家庭の兄弟と比べ「弱者への配慮が出来る」「自立している」「責任感を持てる」等ポジティブな影響を受けることが明らかにされている。しかしその一方で、きょうだいは「自己主張の不足」「自己評価が低くなる」「同胞への対応の苦慮を感じる」「正常な兄弟関係が構築できないなどのストレスや葛藤」等ネガティブな影響を受けることも多く、身体症状に出る場合もある。また、きょうだいはおとなの評価に過敏になり、褒められたい一心で同胞の世話の役割を進んで引き受ける傾向にあることが、戸田（2012）によって明らかにされた。したがって、きょうだいはやりたいことを我慢し、家族で遊びや体験に触れる機会をもてなくなる、という問題が指摘された。また上記のことから、自分の感情との折り合いがつけにくい、対人関係での距離感が適切に取るのが苦手などの「生きづらさ」に繋がる。

しかし、以前に比べ「きょうだい児（この論文におけるきょうだいと同じ意味）」という言葉が世間に広がっており、自身が体験してきた「見えづらい辛さ」を知ってもらいたいという活動が行われている。例えば、1963年に設立された「全国心身障害者を持つ兄弟姉妹の会」（1995年に「全国障害者とともに歩む兄弟姉妹の会」に名称変更している）では、障害児・者への理解や、きょうだいへの理解促進活動など、きょうだいへの支援が行われている。

また、様々な自助グループや研究機関などが行うきょうだい支援の活動内容について、柳澤（2007）によると、きょうだいへの支援は大きく分けて「心理社会的な問題の対処を視野に入れた支援」と「障害児・者に対する理解の促進を視野に入れた教育的支援」の２つに分けられる。心理社会的な問題の対処を視野に入れた支援では、同じ境遇のきょうだいとレクリエーションや話し合いを行う活動を通して日ごろできない体験をし、交流を深め、感情の共有を行うことで、心理社会的な問題の軽減や解決を図ることを目的として行う。教育的支援では、きょうだいが日ごろ抱く障害についての疑問や、障害児・者の特定の行動などに対する対処方法を学ぶことで、障害児・者に対する理解を深め、彼らの示す行動の意味を自分なりに解釈できるようになり、きょうだい自身の心理社会的な安定につなげていくことが可能であるとした。

学校などの教育現場においても障害理解教育が行われている。田名部・細谷（2017）によれば、以前は視覚障害者や肢体不自由などが中心で取り上げられており、知的障害や発達障害などの目に見えにくい障害についてはほとんど取り上げられる機会がなかった。しかし近年では知的障害や発達障害に対する障害理解教育の実践が増えている。

以上のことから、きょうだいは様々な困難に直面することによって、ストレスを抱えやすく、生きづらさに直結する状況にある。また、これらは一般家庭では起こりづらい状況であるため、社会的に理

解・共感されにくいのではないかと思われる。さらに、きょうだいは同胞に対しストレスを感じているということに罪悪感を持つことが多く、そのことから相談したくても我慢してしまったり、そんな自分自身を責めたりしてしまったりと、その辛さを周りに言いづらいことからも、理解・共感されにくい状況を作り出す要因の一つではないかと思われる。学校などの教育現場では障害理解教育も行われており、児童期からの障害に関する理解の促進が図られているが、きょうだいに対する心理社会的問題の理解や、そもそもきょうだいがそのような問題を抱えやすい傾向にあることは、未だに知られていないことが多く、困難を抱えているということを理解されにくい状況であるといえる。

そこで、本研究では、きょうだいが同胞とのかかわりの中でとある問題に直面した際に、どのような困難・気持ちを抱えるかの傾向について調査を行う（研究①）。また、どういった場面でそれらの感情を抱きやすいのかを調査することで、きょうだいが抱える困難を可視化し、どういった対応や支援が効果的かを考察する。また、ネガティブな面ばかりでなく「同胞がいて良かったこと・得をしたこと」などのポジティブな気持ちも取り上げる。その際、きょうだいの気持ちを単純に二極分化せず、どういった過程でその気持ちにいきついたのかを検討する。その後、きょうだいが登場する漫画『光とともに…～自閉症児を抱えて～』と映画『ちづる』を用いた事例研究を行い、物語で描かれたきょうだいの描写から、きょうだいの気持ちを考察しどのようなアプローチが効果的かを検討する（研究②）。

研究①

1. 方法

臨床素材　『きょうだい―障害のある家族との道のり』（白鳥ら，2010）、『障害のある人とそのきょうだいの物語 青年期のホンネ』（近藤ら，2015）、という本の中にある語りの断片からきょうだいの気持ちを抜き出し、どういった気持ちがきょうだいに多く起こるか、どういった場面においてどのような感情が起こるのかの傾向を捉える。『きょうだい―障害のある家族との道のり』では、著者らの話と今まで出会ったきょうだいたちの話を組み合わせて作った架空の事例が年代別に記載されている。『障害のある人とそのきょうだいの物語 青年期のホンネ』では、日本福祉大学にある「きょうだいの会」に所属している学生たちの、きょうだいとしての体験談がつづられており、その多くが幼少期から青年期にかけての同胞や周囲に対する気持ちが書かれている。前者はきょうだいが体験する困難やそれに対する困り感に焦点を当てており、それに対して著者らが客観的な視点から考察・アドバイスを行っているが、後者では困り感だけでなく、同胞といて良かったことやポジティブになれたきっかけなども記されており、きょうだいの気持ちに偏りが出ないよう、これらの文献を選出した。

分析方法　まず、文献内できょうだいの気持ちが語られている箇所を、意味のまとまりごとに区切って断片化し、心理学専攻の学生１名と合議によりKJ法で分類した。その後、きょうだいの気持ちについてどういった気持ちが多く起こるか、どういった場面においてどのような感情が起こるのかの傾向を検討した。また、文献内に同胞の名前が記載されている場合、本稿における引用では、プライバシー保護の観点から、固有名詞を削除し「兄」「弟」「姉」「妹」のように一部変更している。

2. 結果

KJ法による分析の結果、きょうだいの気持ちとして大きなカテゴリー「ポジティブな感情」「ネガティブな感情」「同胞に対する中立的な感情」「必要以上の責任感」の４つにまとめられ、それぞれの大カテゴリーにいくつかの小・中カテゴリーが見出された（詳細は別紙資料参照）。

ポジティブな感情　①「きょうだい」だからできること：「同胞きっかけでできた将来のこと」「同じ立場のきょうだいに対する共感・理解」と、②愛らしさ：「同胞に対するかわいさ」「同胞に対する誇らしさ」と、③受容の３つが含まれた。

ネガティブな感情　①他者へのショック感：「他者に対する絶望感・悲しみ」、「他者に対する怒り」

と、②同胞に対する嫉妬と、③見えにくい辛さの3つが含まれた。特に③は①②に比べより細分化しており、④同胞を受け入れられない：「恥ずかしさ」、「同胞に対する嫌悪感」、「しんどさ」と、⑤がまん：「気持ちの抑圧」、「無気力、あきらめ」の2つの中カテゴリーと、どの中カテゴリーにも属さない「振り回され感」、「可哀想と思われたくない」、「他者からの評価を気にする」が含まれた。

責任感の強さ　①同胞への同情的感情、②無力な自分に対する怒り、③同胞との関わりの3つが含まれた。

同胞に対する中立的な感情　小・中カテゴリーを含んではいないが、『私にとっては（同胞の）弟が弟ということが当たり前だったので、きょうだいに障害があることに関しても特に何も感じていませんでした。』は「ポジティブな感情」にも含まれ、『家族は仕事や外出で他に見る人がいないから、といった理由で弟とのお留守番を頼まれたこともありましたが、「きょうだいだから仕方ない」と考えていました。』は、「責任感の強さ」「ネガティブな感情」にも含まれており、このように複数のカテゴリーに含まれるものもあった。

3. 考察

本研究では、KJ法によってきょうだいの気持ちを分析し検討を行い、大きく分けて4つのカテゴリーに分類することができた。

「ポジティブな感情」における「受容」に関して、“障害”を受け入れられる時期や、受容できる物事はきょうだいによってそれぞれであったが、最終的に同胞を受け入れられていた。また、受容の過程について、初めは周りの目などから同胞を受け入れられなかったが、同胞が施設に行ったことで物理的な距離を置くことができ、さらに同胞の成長がより理解できたため、関わろうとする動きがみられた。そのことから、受容のプロセスとして、同胞との適切な距離を置くことや、外部によるサポートの介入が要因の1つではないかと考えられる。次に「愛らしさ」について、近藤ら（2015）によれば、きょうだい同士で「同胞がいて良かったこと・面白かったこと」を語るときは実に楽しそうだと述べている。これに関して、健常の兄弟しかいない人に話しても理解してもらえないが、きょうだい同士なら伝わり共感してもらえるという安心感から、楽しそうに語れるのではないだろうか。吉川（2008）によれば、同胞のことを友人に話せず、また話すことを親から禁止されていたという経験から辛い思いをしたきょうだいは多いと述べている。よって、きょうだい支援においてネガティブな面ばかりに目を向けるのではなく、ポジティブな語り合いの場は必要だと思われる。

「ネガティブな感情」では、「他者の評価を気にする」、「同胞を受け入れられない」など、きょうだい特有の困り感が多くみられた。「見えにくい辛さ」における「がまん」に関して、気持ちの抑圧が特徴的であった。吉川（2008）によれば、きょうだいが家族の中の問題を悪化させないために「我慢する」という対処法を学ぶと、過剰に我慢し続けるようになると指摘しており、さらに遠矢（2009）は、そのような抑えつけられた感情は心の中にたまり続け、いずれ否定的な感情を言葉で表現できない人格が形成されると述べている。「可哀想と思われたくない」では、きょうだいが同胞の障害を周りに公表することで同情的な目で見られることが嫌だ、という気持ちが強く表れていた。こういった気持ちが起こる理由として白鳥ら（2005）は、きょうだいは相手から「苦労している･かわいそう」と大げさに捉えられたくない、というネガティブな感情や、同胞を「立派に思えること」や「とてもかわいいと思っていること」すら「偉いね」と褒められたくないという気持ちを抱えているためだと述べており、「他者からの評価を気にする」とも関わりがあると考えられる。よって、きょうだいと関わる際には、「偉い」という肯定的側面や「可哀想」などの否定的側面を強調させすぎないことが重要ではないだろうか。

「責任感の強さ」に関して、これは「ポジティブな感情」でも「ネガティブな感情」でもない。「同胞との関わり」では、きょうだいが同胞に対し様々な工夫を自分一人で考え実行しており、“きょうだい”として同胞を受容しているからこそ出来る行動とも取れるが、一方で“親役割”をとることもとしても見ることができるためであ

る。遠矢（2009）によれば、こういったおとなが求める様々なことを文句も言わず上手にこなす裏には、我慢、忍耐、抑制などの、こどもの年齢水準を超えた強い自我コントロールが働いていると指摘している。また、原田・能智（2012）によると、きょうだいの面倒をみることを抵抗なく受け入れていたことの背景に、家族や家族以外に「見栄」や「義務感」があり、同胞の面倒をみられないことはかっこ悪い・ひどいなどといった周囲の思惑を内在化させた結果ではないかと指摘している。また、面倒をみることで周囲に褒められることがあるが、それは“きょうだいとしてあるべき姿”として一般的な期待が込められているとし、その期待に応えないこともまた難しく、余計に見栄を張らざるを得ない状況にあるとした。このことから、同胞との関わりで親のような役割をした背景には、同胞を支えたいという思いや同胞を受容できていたと考えられる一方で、きょうだいとしての責任感や、周囲の期待に応えようとした結果があるのではないかと考えられる。

「同胞に対する中立的な感情」における、「私にとっては（中略）特に何も感じていませんでした。」に関して、柳澤（2007）によれば、きょうだいが障害について知る直接のきっかけは家庭における親からの情報であることから、親の要因の関連によってきょうだいが“障害”というものを理解することにつながる可能性があると指摘している。それらを踏まえ、きょうだいが幼少のころから家族による同胞の説明をしっかりと受けられるような家族機能が働いてれば、このように同胞を理解でき、適切な距離感で関わっていけるのではないかと思われる。

以上のことから、きょうだい支援として、先行研究でも示された通り、同胞の話を理解・共感してくれる人が集まる居場所づくりが有効だと思われる。また、家族や同胞とのかかわりについて、きょうだいの強い責任感や義務感などが過剰に起こらないように、適切な距離感を保つことが重要であると考えられる。そのため、適切な福祉サービスや支援施設を利用し、きょうだいと同胞の距離を物理的・精神的に取ることや、きょうだいの肯定的側面・否定的側面ばかりを強調しないことが必要であると思われる。

研究②

1. 物語の概要

光とともに…～自閉症児を抱えて～　戸部けいこによる、自閉症児とその家族の抱える困難やその乗り越え方を丁寧に描く日本の漫画である。主人公・東幸子のもとに生まれた子ども・光が自閉症と診断され、コミュニケーションのとれない育児や周囲の無理解から幸子は困難に直面し続ける。しかし、夫・雅人と協力しながらの育児や、福祉センターや保育園での仲間との出会いによって、状況に少しずつ変化が訪れる。光が成長するにつれ困難な状況が何度も訪れるが、そのたびに周囲のサポートや幸子の工夫により乗り越え、幸子は育児を通し精神的に成長していく。また、作中で光の妹・花音が生まれ、きょうだいと同胞としての関係も描かれている。

ちづる　立教大学現代心理学部映像身体学科の赤崎正和が、自身の卒業制作として企画し監督したドキュメンタリー映画である。赤崎は、重度の知的障害と自閉症をもつ赤崎の妹である千鶴とその母を１年に渡り撮り続け、カメラを通し同胞である妹と対話を行う。赤崎は映画を撮るまで、身近な存在でありつつも正面から向き合えずにいたが、映画を撮り終える頃には家族との新たな関係を築きあげていることに気づき、赤崎自身の精神的な成長がうかがえる作品となっている。

2. 考察

1) 光とともに…～自閉症児を抱えて～

a) ＜中学校編＞第 12 話では、花音が小学１年生になり、幸子は光の送迎のため先に出て、花音が２人を見送るシーンがあった。その花音の姿に幸子は、「花音の顔がちょっと不安げでお母さんは後ろ髪を引かれる思いです」と述べていた。

b) ＜中学校編＞第 14 話では、花音は体調がよくなかったが、幸子の言うことを聞いて小学校に行くシーンがあった。その後、結局熱が出て早退することになるが、迎えに来た幸子

の顔を見てほっとしたような表情をし、嬉しそうな顔を見せる。

a）に関して、見送るまでは両親に「まかせて」と言い、張り切っていたが、一人になる直前に不安な気持ちを隠せないでいたことから、年相応の反応ではあるが、親に頼られたい気持ちがある反面、不安な気持ちを抱えているが、それを言えない・言い出せない状況にあると考えられる。また、b）では、体調不良にもかかわらず、花音の“聞き分けの良さ”が表れていた。これは花音の性格要因もあると思われるが、しんどいという気持ちを「我慢」するといった、きょうだいの特徴とも言えるのではないだろうか。光につきっきりで忙しそうな幸子を近くで見てきた花音だからこそ、状況把握ができ、親を困らせないように「大丈夫だ」と言い、聞き分けよくしているが、その裏では不安さや孤独感などを抱えこんでいると思われる。また遠矢（2009）は、きょうだいの行動や言葉の裏には、「自分のことを見てほしい」という気持ちがあり、両親が自分のことを考え、自分のために何らかの対応を取ってくれることがわかることは、きょうだいにとってとても大切なことであると指摘している。このことから、幸子のような適度なかかわりを取ることで、きょうだいの不満や寂しさの軽減が期待できると思われるが、両親共働き家庭やひとり親家庭などでは、なかなか実現が難しいのではないだろうか。

＜中学校編＞第12話では、花音・光・幸子で公園に行くが、その場にいた花音の同級生に「へん」と言われてしまう。花音は同級生に対し、光の行動について「今ねすごく喜んでるだけなんだよ」と返答したが、このことがきっかけとなり、花音が同級生の誕生パーティーに自分だけ誘われなかった。その事実を知った花音は家で一人泣いてしまうが、幸子と光が帰ってきたら何事もなかったように振舞った。この話以降、花音は仲間外れやからかいを気にするようになる。

次に、花音の同級生に対する返答に関して、これは花音が、幸子の外での対応を学んでいた、今まで光と長く関わり理解しているからこそ言えたのではないだろうか。これについて、研究①の「同胞との関わり」でも、きょうだいが同胞の特性を理解しており、それが可能だったのは、花音のように長く関わってきたためではないだろうか。また、その後のシーンに関して、白鳥ら（2010）によると、きょうだいが友達に同胞の説明をしたとき、みんなに少し距離を置かれてしまうのを感じ、様々な場面で苦労や葛藤が起こる傾向にあるとしている。また、きょうだいのこういった辛さや悲しい思い・学校生活のことは誰にも話すことができず一人で抱え込みやすい傾向にあり、このことを親に言ってしまえば悲しませてしまうという思いから、そのことをなかなか親に言いづらいと指摘している。実際、公園のシーンで幸子は、光について何か言われたときはすぐに言ってねと言い、花音も「いいよーっ」と答えるが、仲間外れにされたことは言わなかった。花音が幸子に何も言わなかったのは、“同胞について何か言われた”わけではなかったからだとも取れるが、心配させないため・情けない姿を見せないため、言いづらいため言わなかったとも取れるのではないだろうか。

c）＜中学校編＞第18話での、花音・光・幸子でスーパーに買い物に行くシーンで、光が他の買い物客に「だまって持って行くのはドロボーさん」と言ってしまう場面があった。その近くに花音の同級生がおり、不思議な顔をされたりからかわれたりするが、花音は恥ずかしそうな、ばつが悪いような、困ったような、様々な気持ちが見て取れる表情をして、気にしていた。その後の遠足に行くシーンでも同級生からからかわれ、光のことを「バカ」呼ばわりされてしまい、ついに堪忍袋の緒が切れた、という様子で同級生とケンカになってしまう。

d）同じく18話での家族でしりとりするシーンにて、光が「カ」が回ってきたときにすぐさま「花音ちゃん」と答える場面があった。そ

れに対し幸子は花音に「きっとお兄ちゃんにとっては“カ”と言えば花音ちゃんなんだよ」「一番に思い出すんだよ」と言い、花音も「そうかなァへへへ」とまんざらでもない様子であった。また、＜中学校編＞第11話での家族で水族館に行くシーンで、光が騒がしい音に反応して動けなくなってしまうシーンがあった。幸子は、花音が着けたものなら光も抵抗なく着けてくれるから、と花音と協力してイヤーマフを渡し、すんなりイヤーマフを装着した光も安心して落ち着いた。

c）に関して、研究①でもみられたが、「他者へのショック感」の「他者に対する怒り」で、「理解してもらえない」ことに対し怒りを露わにしている。自分が侮辱の対象になったことへの怒りよりも、同胞を理解してもらえない・受け入れてもらえないことへの怒りのエネルギーがより高いのではないだろうか。また、他者に対する怒りに関しては研究①でも見られたが、花音のように行動や言動を表さず、誰にも言えず「我慢」につながっていたケースが多かった。そういった違いについて、性格や年齢という要因も考えられるが、やはりフィクションと実際の“差”があるように思われる。

またd）に関して、しりとりをする場面などは、研究①で見られた「同胞に対するかわいさ」につながるのではないだろうか。また第11話の場面では、花音は母親に褒められて嬉しそうにしており、また、花音がいることでスムーズにいったケースのように思われる。こういった場面から、これまでの兄妹として・家族としての“適切な距離感”を持った関りがあったからこそ、外出先でのトラブルにも適切な対応が可能だったのではないだろうか。

2）ちづる

冒頭では、「僕が小学生の頃障害者を差別する“シンショー”という言葉が流行った」「それ以来僕は妹の話題を避けてきた」と赤崎の気持ちがつづられていた。その思いが現れたきっかけとして、赤崎は、自分にとって同胞のことは「普通のこと」であるのに、学校や友達との間で同胞の話になると、変な空気が流れたり壁を感じたりすることがあり、それが嫌だったからと作中で語っている。これに関して、研究①であったように、きょうだいはこういった気持ちを抱えやすく、またこれらは見えにくい辛さであるため、見逃されがちである。また、白鳥ら（2010）によれば、きょうだいのこういった辛さや悲しい思い・学校生活のことは誰にも話すことができず一人で抱え込みやすい傾向にあり、このことを親に言ってしまえば悲しませてしまうという思いから、そのことをなかなか親に言いづらいと指摘している。また、「変な空気が流れる」や「壁を感じる」という部分や研究①から、きょうだいは同胞に対する他者からの評価により敏感であるように思われる。

また、作中では同胞が不安定になるシーンも映されている。その不安定になった理由に対し、母親は理解できなかったがきょうだいは理解・共感したシーンがあった。このことから、母親よりもきょうだいの方が同胞の理解者であるように考えられる。遠矢（2009）によれば、きょうだいは幼少期から遊びなどを通して同胞と関わる時間が長いため、同胞の性格や障害を理解しやすいと指摘しているが、赤崎はできるだけ関わりを避けてきたと述べている。しかしこのように理解・共感できたのは、2人の年齢が近いという要因や、同胞のことを幼少期から「普通」と思い接してきたため、母親や周囲の人に比べ「障害を持っていて支援を必要とする特別な人」というフィルターがないという要因が考えられるのではないだろうか。

中盤では、赤崎は「妹を撮り続けるうちに僕は障害者に携わる仕事に関心をもった」「卒業後義肢装具士の学校に通いたいと思い母に伝えた」と述べていた。また赤崎はそのことから就職活動をやめてしまっている。研究①でも見られたが、きょうだいの将来の進路として障害児・者のサポートをしたいと考えやすい傾向にあると思われる。吉川（2008）によると、きょうだいの身近な職業として「教育・福祉・医療職」が多いが、その領域に進むきっかけとしてまれに、自分にとって立ち向かいたくない・見たくないものを避けるための理由として同胞の存在を使っている場合があると指摘している。「障害児・者をサポートす

る」ことをポジティブに考え、自分の強い意志によってその進路に決めるのであれば良いと思われるが、それが無意識あるいは一種の使命感のような状態になっている、もしくは回避のために同胞を利用している場合、燃え尽き症候群やストレスによる体調不良が起こる危険が考えられるため、このような急な進路変更がみられた場合、注意が必要ではないだろうか。

3) まとめ

研究②では、漫画『光とともに…～自閉症児を抱えて～』（以下『光とともに』と記す）と映画『ちづる』を用いた事例研究を行い、物語で描かれたきょうだいの描写や語りから、きょうだいの気持ちを考察した。はじめに２作品について、対比が多く存在していたのが印象的であった。例えば、きょうだい・同胞の出生順に関しては、『光とともに』では兄が同胞、妹がきょうだいであるのに対し、『ちづる』では兄がきょうだい、同胞が妹であった。また、それ以外の違いに関して、年齢や家庭環境、同胞との関わりや、きょうだいの友達に対する対応の仕方などがあった。特に友達やクラスメートへの対応の仕方に関しては、『光とともに』では、同胞の特性について説明する、同胞のことを馬鹿にしたクラスメートとケンカになる、などがみられたが、『ちづる』では、友達との間で同胞の話題を避け、障害児・者の悪口を言われても我慢をしていた。この違いに関して、性別や性格の違い、きょうだいの出生順の違いなどの要因が考えられるが、フィクションとノンフィクションの違いがあると思われる。

このような対比がある一方で、きょうだいの抱きやすい気持ちに関して一致する部分があった。特に、友達から同胞をどう思われるかを気にする、他者からの評価に敏感になるなどがみられ、これらは研究①でもみられた。

総合考察

本研究では、きょうだいの語りや、きょうだいが登場する文献から、きょうだいの気持ちを考察し、きょうだいにとってどのようなサポートが適切であるかの検討を行った。きょうだいの育った環境や同胞の障害の程度によって、きょうだいの困り感や辛さはそれぞれ違うが、きょうだいの起こりやすい行動や気持ちの傾向などが明らかになった。

研究①で分類されたきょうだいの気持ちに関して、研究②でも一致する部分がみられた。特に、「他者へのショック感」、「がまん」、「他者からの評価を気にする」、「同胞のかわいさ」は両作品にみられた。「他者へのショック感」に関して、両作品から、同胞や“障害”について理解してもらえない、という部分によりショック感が向けられていると考えられる。また、「がまん」に関しては、言いたいことを我慢する、悲しい気持ちを心にとどめておくなど、「気持ちの抑圧」が特にみられ、先行研究通りの結果となった。「他者からの評価を気にする」に関して、両作品とも同胞に対するクラスメートや友達からの反応を気にしており、空気感や壁のようなものを敏感に感じていた。その敏感さが我慢につながる要因の１つではないだろうか。また、「同胞のかわいさ」に関して、しりとりやカメラ越しのコミュニケーションなど、同胞のふとした一場面から興味や愛らしさ、誇らしさを感じている場面がみられ、そういった普段からの何気ない関わり合いが、同胞を愛らしく思うきっかけにつながり、受容につながるのではないだろうか。またそういったプロセスにおいて、吉川（2008）が述べていたように、きょうだいと同胞や家庭との間に適切な距離感を保つことが重要になると思われる。

次に、研究②での２作品からみえたものに関して、きょうだいの他者への対応での違いが対照的であった。『光とともに』では、友達やクラスメートに同胞のことについて教える場面や、同胞を馬鹿にされたときには怒りを表出していた。それに対し『ちづる』では、友達の前で同胞や障害の話題は避け、障害に関する悪口を聞いても我慢しており、研究①でも怒りの表出はせずに我慢にとどまっていたことから、実際のきょうだいは我慢という選択を取ることが多いと思われる。『光とともに』における、同胞を馬鹿にされた相手に対し怒るという行動は、周囲の人間や親から見れば素晴らしい・感動的な行動に見える。しかし、きょうだいにとっては、このような行動を取ることは

難しいことであり、こういった対応を周囲の人が期待することによって、きょうだいは使命感や責任からそれに応えようと負担につながると考えられるため、このような行動への過度な期待をきょうだいに向けないよう注意すべきだと思われる。

以上のことから考えられるきょうだいへの適切な支援について、先行研究でも示された通り、レクリエーション活動に加え、きょうだい同士が同胞の話を理解・共感しあえる居場所を作ることが重要ではないだろうか。しかし、槙野ら（2003）によれば、支援の場において、きょうだいは家庭内役割を多く担いつつ、他の健常児同様の活動も行うため、支援の場所や時間を確保しにくいという点や、「この子は健康だから」という親の意識にきょうだい自身がとらわれ、支援を拒否することもありうることを指摘している。そのため、「支援」であることを大々的に示さず、表向きには「きょうだい同士のレクリエーションの場」という名目で開催し、きょうだいに余計な負担や責任感などを感じさせないような工夫が必要だと思われる。

謝　辞

本研究にご協力くださいました関係各位に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。研究するにあたり、田中史子教授をはじめ、心理学専攻の学生のご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。最後に、ここまで私を支えてくれた家族にも感謝の意を表したいと思います。

引用・参考文献

赤崎正和　ちづる　赤崎正和・赤崎久美・赤崎千鶴出演　2011「ちづる」上映委員会

原田満里子・能智正博　2012　二重のライフストーリーを生きる―障がい者のきょうだいの語り合いからみえるもの　質的心理学研究，11，26-44.

石崎優子　2002　障害児・難病児の同胞の心理社会的問題と患児が家族の心理面に与える影響―障害児・難病児の両親の神経症傾向ならびに心理社会的問題を持つ同胞の割合―．メンタルヘルス岡本記念財団研究助成報告集，13，17-23.

近藤直子・田倉さやか・日本福祉大学きょうだいの会　2015　障害のある人とそのきょうだいの物語―青年期のホンネ　株式会社クリエイツかもがわ

槙野葉月・大嶋巌　2003　慢性疾患時や障害児をきょうだいに持つ高校生のきょうだい関係と心理社会的適応―性や出生順位による影響を考慮して―こころの健康，18（2），29-40

白鳥めぐみ・本間尚史・諏方智広　2010　きょうだい―障害のある家族との道のり　中央法規出版

田名部沙織・細谷一博　2017　障害理解教育の変遷と今後の課題～実践を中心とした今後の展望～．北海道教育大学紀要（教育 科学編），67（2），93-104

戸部けいこ　2011　光とともに…～自閉症児を抱えて～ 8（秋田文庫）秋田書店

戸部けいこ　2011　光とともに…～自閉症児を抱えて～ 9（秋田文庫）秋田書店

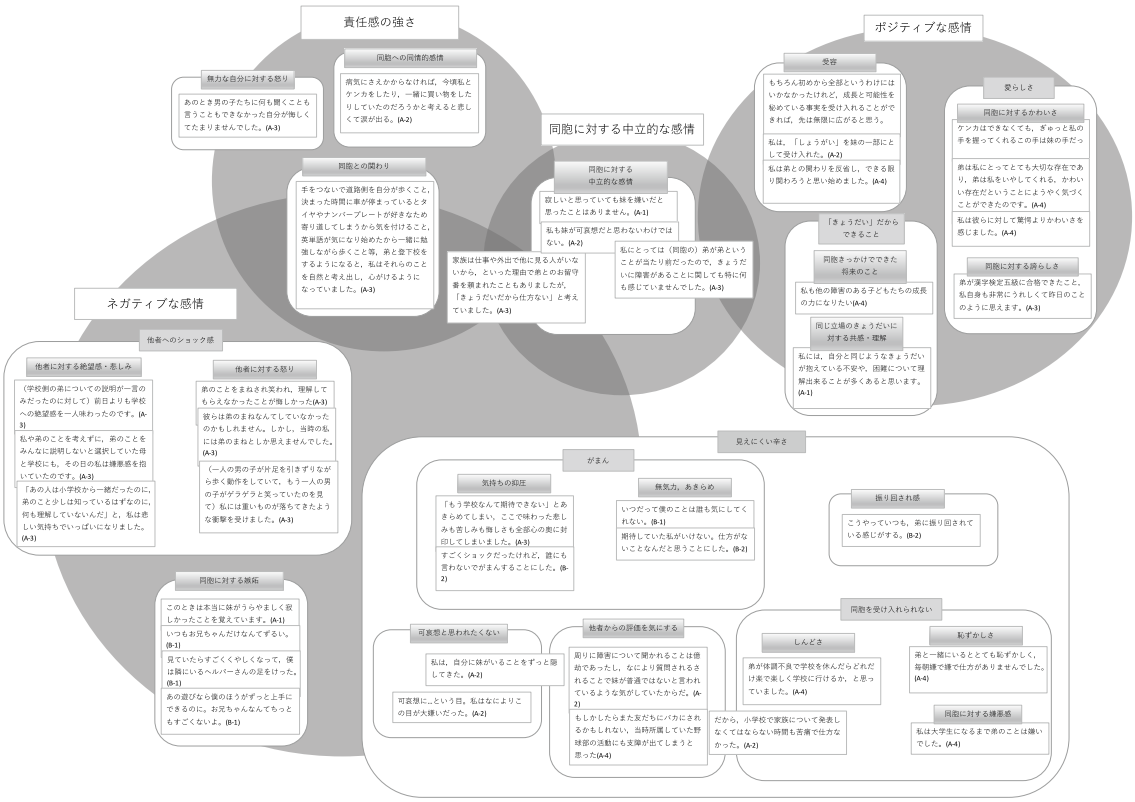
戸田竜也　2012　障害児者のきょうだいの生涯発達とその支援．障害者問題研究，40（3），10-17

遠矢浩一　2009　障がいをもつこどもの「きょうだい」を支える―お母さん・お父さんのために　株式会社ナカニシヤ

柳澤亜希子　2007　障害児・者のきょうだいが抱える諸問題と支援のあり方　特殊教育学研究，45（1），13-23

吉川かおり　2008　発達障害のある子どものきょうだいたち―大人へのステップと支援　株式会社生活書院

映画『ちづる』公式サイト　2011　http://chizuru-movie.com/index.html（2023 年 8 月 7 日閲覧）


責任感の強さ
無力な自分に対する怒り
あのとき男の子たちに何も言えることも言うこともできなかった自分が悔しくてたまりませんでした。(A-3)
同胞への同情的感情
病気にさえかからなければ，今頃もとケンカをしたり，一緒に買い物をしたりしていたのだろうかと考えると悲しくて涙が出る。(A-2)
同胞との関わり
手をつないで道路側を自分が歩くこと，決まった時間に車が停まっているとタイヤやナンバープレートが好きなため寄り道してしまうから気を付けること，英単語が気になり始めたから一緒に勉強しながら歩くこと等，弟と登下校をするようになると，私はそれらのことを自然と考え出し，心がけるようになっていました。(A-3)
同胞に対する中立的な感情
同胞に対する中立的な感情
寂しいと思っていても妹を嫌いだと思ったことはありません。(A-1)
私も妹が可哀想だと思わないわけではない。(A-2)
家族は仕事や外出で他に見る人がいないから，といった理由で弟とのお留守番を頼まれたこともありましたが，「きょうだいだから仕方ない」と考えていました。(A-3)
私にとっては（同胞の）弟が弟ということが当たり前だったので，きょうだいに障害があることに関しても特に何も感じていませんでした。(A-3)
ポジティブな感情
受容
もちろん初めから全部というわけにはいかなかったけれど，成長と可能性を秘めている事実を受け入れることができれば，先は無限に広がると思う。
私は，「しょうがい」を妹の一部にとして受け入れた。(A-2)
私は弟との関わりを反省し，できる限り関わろうと思い始めました。(A-4)
愛らしさ
同胞に対するかわいさ
ケンカはできなくても，ぎゅっと私の手を握ってくれるこの手は妹の手だっ
弟は私にとってとても大切な存在であり，弟は私をいやしてくれる，かわいい存在だということにようやく気づくことができたのです。(A-4)
私は彼らに対して繁愕よりかわいさを感じました。(A-4)
同胞に対する誇らしさ
弟が漢字検定五級に合格できたこと，私自身も非常にうれしくて昨日のことのように思えます。(A-3)
「きょうだい」だからできること
同胞さっかけでできた将来のこと
私も他の障害のある子どもたちの成長の力になりたい(A-4)
同じ立場のきょうだいに対する共感・理解
私には，自分と同じようなきょうだいが抱えている不安や，困難について理解出来ることが多くあると思います。(A-1)
ネガティブな感情
他者へのショック感
他者に対する絶望感・悲しみ
（学校側の弟についての説明が一言のみだったのに対して）前日よりも学校への絶望感を一人味わったのです。(A-3)
私や弟のことを考えずに，弟のことをみんなに説明しないと選択していた母と学校にも，その日の私は嫌悪感を抱いていたのです。(A-3)
「あの人は小学校から一緒だったのに，弟のこと少しは知っているはずなのに，何も理解していないんだ」と，私は悲しい気持ちでいっぱいになりました。(A-3)
他者に対する怒り
弟のことをまねされ笑われ，理解してもらえなかったことが悔しかった(A-3)
彼らは弟のまねなんてしていなかったのかもしれません。しかし，当時の私には弟のまねとしか思えませんでした。(A-3)
（一人の男の子が片足を引きずりながら歩く動作をしていて，もう一人の男の子がゲラゲラと笑っていたのを見て）私には重いものが落ちてきたような衝撃を受けました。(A-3)
同胞に対する脅威
このときは本当に妹がうらやましく寂しかったことを覚えています。(A-1)
いつもお兄ちゃんだけなんてずるい。(B-1)
見ていたらすごくやしくなって，僕は隣にいるヘルパーさんの足をけった。(B-1)
あの遊びなら僕のほうがずっと上手にできるのに。お兄ちゃんなんてちっともすごくないよ。(B-1)
見えにくい辛さ
がまん
気持ちの抑圧
「もう学校なんて期待できない」とあきらめてしまい，ここで味わった悲しみも苦しみも悔しさも全部心の奥に封印してしまいました。(A-3)
すごくショックだったけれど，誰にも言わないでがまんすることにした。(B-2)
無気力，あきらめ
いつだって僕のことは混ち気にしてくれない。(B-1)
期待していた私がいけない。仕方がないことなんだと思うことにした。(B-2)
振り回され感
こうやっていつも，弟に振り回されている感じがする。(B-2)
可哀想と思われたくない
私は，自分に妹がいることをずっと隠してきた。(A-2)
可哀想に…という目。私はなによりこの目が大嫌いだった。(A-2)
他者からの評価を気にする
周りに障害について聞かれることは億劫であったし，なにより質問されるされることで妹が普通ではないと言われているような気がしていたからだ。(A-2)
もしかしたらまた友だちにバカにされるかもしれない，当時所属していた野球部の活動にも支障が出てしまうと思った(A-4)
だから，小学校で家族について発表しなくてはならない時間も苦痛で仕方なかった。(A-2)
同胞を受け入れられない
しんどさ
弟が体調不良で学校を休んだらどれだけ楽で楽しく学校に行けるか，と思っていました。(A-4)
恥ずかしさ
弟と一緒にいるととても恥ずかしく，毎朝嫌で嫌で仕方がありませんでした。(A-4)
同胞に対する嫌悪感
私は大学生になるまで弟のことは嫌いでした。(A-4)